

## ☆講演会☆

### ～ノグチゲラの分布南限「東村」で考える「やんばるの森」のこれから～

講師 小高 信彦（森林総合研究所九州支所 主任研究員）

平成 22 年 7 月 25 日（日）17：30～19：00 東村立山と水の生活博物館 参加者：32 名

やんばる自然体験活動協議会主催の講演会 ～ノグチゲラの分布南限「東村」で考える「やんばるの森」のこれから～を森林総合研究所・主任研究員の小高信彦氏を講師に迎え、東村立山と水の生活博物館で開催、これまでのノグチゲラ研究成果から、ノグチゲラの子育てとつがい形成、2007 年から始めた分布調査と 2010 年の分布最新情報について発表していただきました。

#### 「これまでの研究成果から」

地中のセミの幼虫やキムラグモなどを食べるのはキツツキでは世界でもノグチゲラしかみられないということ、オスとメスで餌場に違いがあり、利用可能な資源が増えること、湿潤な亜熱帯気候で土壌層が薄く地面の中の生き物が取りやすいこと、もともと食肉目哺乳類が存在していなかったことなどが背景にあり、沖縄という島で独自に進化し、生き残ってこられたキツツキだと説明してくれました。

#### 「ノグチゲラの暮らし、子育てやオスとメスのつがい形成について」

1999 年から始めた環境省の保護増殖事業の成果を中心に、ノグチゲラの生態について、卵の数や巣立ちヒナ数、繁殖年齢、足環のついたオスのダイは 10 年間、毎年同じメスと繁殖しており、一夫一妻で、オスとメスの絆がとても強いことなど、これまで知られてなかった意外なことがわかってきました。

西銘岳のノグチゲラは姉さん女房が多く、メスが繁殖できず、婿不足が生じているという話では、その原因として考えられるのは地上でエサを採るオスはネコやマンガースなどの捕食者に狙われやすい可能性が、これは地上で餌をとるヤンバルクイナやノグチゲラたちにとって深刻な問題であると指摘されました。

#### 「地域参加によるやんばる希少鳥類一斉調査」

地域に住んでいる人達と行っている調査（プレイバック調査：鳥の鳴き声を流し、それに反応した個体を数える）で 2007 年から 2010 年まで、国頭、大宜味、東の 3 村で実施した調査結果を速報していただきました。ノグチゲラは 2007 年には東村博物館、2010 年には福地ダム南側のイノガマで確認されていました。STライン（大宜味村塩屋～東村平良）で森林分断や農地などができ大きな障壁になっており、南限地域での個体群を回復するのが今後の課題だとしました。

最後に、ノグチゲラと人との関わりの中で、地元、辺土名高校がノグチゲラをはじめとする固有鳥類の調査で二年続けて大きな賞を取ったことにふれ、ここだけにしかない生き物の調査は高く評価されていること、ノグチゲラが地域の住民のためになればいいとし、話をとじました。

今回はノグチゲラが村鳥の東村で開催とあって地元東村の方たちがたくさん参加してくれました。参加者からは「マンガースの侵入防止柵の成果はあるか？」や「ノグチゲラが巣穴を掘るのにエゴノキは使わないのか？」等々の質問もあり小高さんの話に熱心に耳を傾けメモを取ったりしていました。

